

小中移行期における時間的展望と適応の関連 —中 1 ギャップの実態を探る—

山口 倫史 古川 雅史

【問題と目的】

小学校から中学校への移行後において、不登校、いじめ、非行等の問題行動が増加することは広く知られている。文部科学省(2008, 2009, 2010)によると、小学校 6 年生と中学校 1 年生を比較した場合、不登校者数が約 3 倍、暴力行為の加害児童生徒数は約 6 倍増加することが毎年報告されている。この移行について、山本・ワップナー(1992)は「危機的人間・環境移行」のひとつであるとしている。危機的人間・環境移行という考え方は、Wapner, Kaplan, & Cohen (1973)の有機体発達論に基づいている。小学校から中学校へと進学することは、環境の変化と個人の発達の变化という二つを同時に体験する移行であり、まさしく危機的な移行である。中学進学後に不登校や暴力行為等が激増する中 1 ギャップとも言われる現状につながる背景には、このような危機の存在が考えられる。

小学校から中学校への移行期に関する研究は数多く存在し、多くの研究が、中学校移行のネガティブな影響を報告している。特に米国においては、Wigfield, Eccles, Iver, Reuman, & Midgeley (1991)は生徒の有能感、Harter & Kowalski (1992)は有能感と内発的動機づけ、Berndt, Hawkins, & Jiao (1999)は友人関係について、Simmons, Burgeson, Carlton-Ford, & Blyth(1987)及び Seidman, Allen, Aber, Mitchell, & Feinman(1991)は自尊感情について、それぞれ中学校入学後に悪化あるいは低下するとしている。

落合(2000)によれば、ある小学校の学級通信に掲載された児童の日記から、小学 6 年生は他の学年よりも学期によって児童の様子が変わり、特に秋の運動会を過ぎる頃になると、残り少なくなった小学校生活を思うと同時に未来への不安が生じ始めることが報告されている。そして、日記の内容は 3 学期になると大きく変化し、卒業間近の自分を取り巻いている環境がすっかり変わってしまうことに対する期待と不安が見出されている。

また、小学 6 年生の中学校への環境移行における学校適応感と期待・不安・目的意識との関係を検討した澤田・古川(1996)によれば、小学校での適応感が低い者は高い者に比べて中学校に対する不安が高く、中学校入学前の時点において新しく始まる中学校生活をあまりポジティブにはとらえておらず、小学校での適応感が入学前の中学校生活に対する期待・不安・目的意識に影響を与え、それが中学校での適応感の差となっていることが示唆されている。

こうした点から、環境移行期にさしかかった小学 6 年生に対し、中学校入学前に中学校に対する期待を育て、目的達成の自身を高める(澤田・古川, 1996)ような働きかけを行うことが、中学校での学校適応を促進していくことになるのではないかと考えられる。そこで本研究では、環境移行期の適応感を検討するためのひとつの指標として時間的展望を取り上げる。

Lewin(1954)は場の理論において、生活空間を構成する要素として時間的展望(time perspective)を位置づけ、個人の生活空間は現在だけでなく、過去や未来も含んだものであるとした。都筑は時間的展望について、目標や計画を中心にした場合、「個人の心理的な過去・現在・未来の相互関連過程から生み出されてくる、将来目標・計画への欲求、将来目標・計画の構造、および、過去・現在・未来に対する感情」(都筑, 1999, p.36)であると定義している。本研究における時間的展望は、都筑(1999)の定義に基づくものである。白井(1997)は、時間的展望の獲得によって現在の意味をとらえなおしたり、現在の活

動に没頭できるようになることや、将来の目標に合わせて、現在の行動を選択することができる」と述べている。したがって、時間的展望の獲得は個人と環境の相互交流の中で、自己を取り巻く環境への適応を促進する働きを持つものであると考えることができよう。

都筑(2004a, 2004b)は小学校4年生から中学校3年生までを対象に、縦断的な調査を行い、①学年が上がるとともに将来の希望が弱まり、空虚感が強まるとともに計画性が低くなるなどの発達的な変化があること、②過去の自分や現在の自分に対する評価や価値づけを通して時間的展望が形成されるということ、③不安と期待の感情が組み合わされたときには、時間的展望に対し肯定的な影響があること、④適応に関しては、学校を避ける傾向にある群は将来の希望が持ちにくいこと、などを明らかにしている。

しかし、この研究は時間的展望の調査項目を、「将来の希望」、「空虚感」、「将来目標の渴望」、「計画性」の4因子で構成している。これは、未来に重点が置かれた、やや限定的なものとなっており、過去・現在・未来の相互関連過程を包括的に捉えようとしたものではなかった。

このように国内外において、小中移行期についての研究は見られるものの、未来や現在、過去といった時間の流れまでも視野に入れ、適応とそれに関連する事象についての研究は、まだ十分に深められていないのが現状である。

時間的展望に関する質問紙には、大学生・専門学校生を対象に開発された白井(1997)の時間的展望体験尺度があるが、小学生への適用例はない。都筑(2004a)は、大学生用に開発された尺度(都筑, 1999)をもとにして、小学生対象の尺度を作成しているが、過去に関する時間的展望については測定されていない。

そこで、本研究では、白井(1997)をもとに、都筑(2004a)の小学生に配慮されている項目を取りこみ、時間的展望について過去・現在・未来の全体を測定できる、小学生にも適用可能な時間的展望尺度を作成し、移行期の児童・生徒がどのような時間的展望を有しているのかを検討することを目的としている。

本研究における調査対象の学校は全てX県Y市立の比較的都市郊外に位置し住宅地の多い地域にある公立学校である。A小学校とB小学校は校区が隣接しており、私立中学へ進学する児童と、他地区へ転居する児童をのぞく全員がC中学校へ進学する。また、C中学校へ進学する小学校はこの2校のみである。

各校の具体的な規模は以下の通りである。A小学校は全校児童約380名で全14学級(6年生は2クラス)、B小学校は全校児童約580名で全17学級(6年生は3クラス)であった。またC中学校は全校生徒約480名で全17学級(1年生は5クラス)であった。C中学校への移行に関連する特徴的な取り組みとしては、小学校から中学校に見学へ出かけること(約100分)と、中学校の教師が小学校に出向き授業をする(出前授業)こと(45分)があげられる。この内容は、A小学校・B小学校で共通であり、本研究の調査実施時においては、両校ともこれらの取り組みを終えていた。

この研究は、修士論文を継続して行っているものである。論文を投稿したところ査読者より、本研究の根幹の一つである時間的展望尺度の解釈について。そこで今回は、この時間的展望尺度についての分析をやり直し、より妥当性のある解釈を追求することにした。

【方法】

研究協力者

本研究ではX県Y市内の2小学校の6年生165名(男子95名、女子70名)が研究協力者として本研究に参加した。研究協力者の内訳は、A小学校は2クラス57名(男子35名、女子22名)、B小学校は3クラス108名(男子60名、女子48名)であった。

手続き

調査は A 小学校では調査者の教示のもとに、学級ごとに集団で実施された。B 小学校では、学級担任が調査者の作成した手引きをもとに教示を行った後、学級ごとに集団で実施された。質問紙は、フェイスシート（性別、同定のための誕生日と名前のイニシャル）と調査前に策定された時間的展望尺度（原尺度）によって構成された。なお、原尺度の項目は、白井(1997)の時間的展望体験尺度、都筑(2004a)の時間的展望尺度、都筑・白井(2007)、都筑(2008)を参考に、教員養成系大学の大学院で心理学を専攻する現職教員 3 名（小学校 2 名、中学校 1 名）と心理学を担当する教員 1 名の計 4 名によって、小学生でも適応可能なように検討を経て策定され、構成は、「過去に関するもの」（例：過去のことはあまり思い出したくない）5 項目、「現在に関するもの」（例：今の自分は本当の自分ではない気がする）5 項目、「未来に関するもの」（例：私のこれから先のしょうらいは明るいと思う）5 項目の小学生にも適用可能と思われる 15 項目から構成されていた。尺度は「あてはまらない、どちらかといえばあてはまらない、どちらともいえない、どちらかといえばあてはまる、あてはまる」の 5 件法で回答が求められた。

【結果】

それぞれ、「あてはまらない」を 1 点、「どちらかといえばあてはまらない」を 2 点、「どちらともいえない」を 3 点、「どちらかといえばあてはまる」を 4 点、「あてはまる」を 5 点として得点化し、尺度の因子構造を明らかにするために、15 項目について主因子法による因子分析を行った。因子負荷量、因子の解釈の可能性から 2 因子構造が妥当であると考えられ、そこで再度 2 因子を仮定して最尤法—プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、最終的に 2 因子 13 項目が検出された（Table 1 参照）。第 1 因子は、「不満なことがたくさんある」や「毎日が何となく過ぎていくように感じる」など主に過去や現在を否定的にとらえようとする項目で構成されているので、「現在の生活の否定的受容」と命名した。第 2 因子は「これまでに楽しい思い出がたくさんある」や「大きくなってから何になりたいか決めている」など主として未来に関連する項目で構成されているので、「肯定的過去受容と未来展望」と命名した。尺度の内的整合性を検討するために尺度全体と下位尺度で Cronbach の α 係数を算出した。その結果、全体は $\alpha=.73$ で、下位尺度においては「現在の生活の否定的受容」 $\alpha=.70$ 、「肯定的過去受容と未来展望」 $\alpha=.69$ であった。以上の結果から、本尺度は信頼できる内的整合性を有し、短期間の時間的要因に用留変動が少なく安定した尺度であることが明らかとなった。

【考察】

因子分析の結果、本尺度と白井(1997)や都筑(2004a)の尺度と比べると因子構造に大きな違いが見られた。白井(1997)の時間的展望体験尺度は「現在の充実感」、「目標指向性」、「過去受容」、「希望」という過去・現在・未来に関する領域がそれぞれ独立する 4 因子構造であったが、本尺度では、否定的な過去と現在、あるいは肯定的な過去と未来が混在する 2 因子構造となっていた。

このような因子構造の大きな違いについて、調査対象者の発達段階の違いが考えられる。すなわち、白井(1997)の場合は調査対象が大学生や専門学校生であり、本研究の対象対象は小学 6 年生であった。小学校の卒業式で、卒業証書を受け取った際に自分の夢や決意などを述べる光景を見かけることがある。そうした場面での内容は、「プロ野球選手になります」といったかなり遠く先のことで実現の可能性が定かでないものや、「中学校に行ったら〇〇部に入ります」とか「新しい友だちをたくさん作ります」とい

Table1 時間的展望尺度の因子分析結果(最尤法-プロマックス回転) $\alpha=.73$

	第1因子	第2因子	策定時に予想された領域
第1因子「現在の生活の肯定的受容」 $\alpha=.70$			
14不満なことがたくさんある *	.73	.13	現在
2毎日がなんとなく過ぎていくように感じる *	.55	.16	現在
11今の自分は本当の自分ではない気がする *	.54	.03	現在
3過去のことはあまり思い出したくない *	.52	.00	過去
5毎日が同じことのくりかえしでたいくつだ *	.50	-.20	現在
15もう一度小さいころにもどってやり直したい *	.50	.16	過去
第2因子「肯定的過去受容と未来展望」 $\alpha=.69$			
9これまでに楽しい思い出がたくさんある	.05	.64	過去
6これまでの生活は楽しかった	-.18	.60	過去
8毎日が楽しい	-.27	.58	現在
7大きくなったらやってみたいことがある	.20	.50	未来
1大きくなってから何になりたいか決めている	.21	.50	未来
12昔の思い出が大切だと思う	.08	.47	過去
初期の固有値	27.97	15.18	
因子間相関			
第1因子	—	.50	
第2因子		—	

* 逆転項目

ったかなり現実的なものとはほぼ二分されているように思われる。そこには、周りの友だちよりもスポーツがよくできたというような肯定的な過去の受容から繋がるかなり遠く先への展望と、現在やこれまでの自分を肯定的に受容できなかったため、中学校という新環境で再構造化を図ろうとする意志が表れているように感じられる。このように、小学6年生の時間的展望は過去・未来・現在と明確に分かれるものではなく、むしろ肯定的なとらえ方か否定的なとらえ方かという特徴を示しているように思われる。本尺度の第1因子には、策定時に過去と予想された2項目と現在と予想された5項目全てが含まれていた。過去と現在が混在していることについて、小学6年生にとって過去と現在の明確な区分がどこまでできているのかということが疑問として残る。しかし、因子全体としては過去や現在を否定的に受け止めていることを示すものであると判断できる。また、第2因子には、策定時に過去と予想された3項目と未来と予想された3項目が含まれていた。過去と未来が混在しているが、第1因子の箇所述べたように、過去と未来の明確な区分がなされないまでも、肯定的に過去を受容する中で未来への展望を持つという特徴を示しているといえるだろう。

以上のことから、本尺度は小学校6年生の時間的展望の特徴を測定し得る尺度であると判断できる。

本研究では、現段階において多く課題を残しているのが現状である。今回の分析で結果を導き出した因子構造の解釈については、まだ再考の余地がある。なぜなら、本研究の目的の一つが、時間的展望について過去・現在・未来の全体を測定できる、小学生にも適用可能な時間的展望尺度を作成することであり、現在の因子構造の解釈では、その目的が達成できたとは言いがたいからである。今後は今回の分析結果・考察を生かし、小学生過去・現在・未来の時間的展望全体を測定できる尺度を開発する必要がある。そして、その尺度を用いて学校適応感との関連について研究していくことで、より学校現場に有用な知見が得られることが期待される。